

地域文化事情読み教材『まつえりあ』の開発と評価

—松江地域の特色ある多文化共生社会の構築を目指した試みの一つとして—

山本達之*・松田みゆき**

(*鳥根大学生物資源科学部, **東京外国語大学留学生日本語教育センター)

The making and evaluation of "MATSUERIA", a specialized reader in the culture of Matsue - An approach for building up a multicultural community in Matsue region -

Tatsuyuki YAMAMOTO, Miyuki MATSUDA

Abstract

A new Japanese reading reader written in Japanese, named "MATSUERIA", was developed by a newly formed Japanese teaching volunteer group. The reader was written in easy Japanese to introduce the culture of Matsue mainly to settled foreigners. It was composed of a number of chapters each of them has an original index label, which visually indicates the recognizability of the topic and the Japanese level of the chapter. The processes of making up the reader and its application to the class room gave important learning opportunities to the each member of the volunteer writers and editors. Such learning experiences may give a trial model which helps the effort to build up a distinctive multicultural society in Matsue region.

I. はじめに

筆者らは、松江地域で日本語の学習支援活動を行っている日本語ボランティア等を中心とした勉強会および編集委員会を組織して、在住外国人向けの地域文化事情の読み教材として『まつりあ』(全48ページ及び付録)を開発した。本教材の特徴は、地域の風土、歴史、行事、伝説、食、地域語など文化事情に関わる事柄を中心に扱った点である。平易な日本語で文化事情の情報提供をすることによって、地域日本語教室やホストファミリーなどの文化接触の場面で日本語による交流のきっかけを創出することを第一の目的として開発した。本教材を開発した背景には、生涯学習者としての日本語ボランティアと、大学教員や日本語ボランティア養成講座講師の立場にある筆者らが関わって来た、松江地域の日本語学習支援活動がある。最初に、『まつりあ』開発に至るきっかけとなった背景を改めて概観する。その後、今回開発した教材『まつえりあ』の紹介や評価について言及する。更に、本教材の開発過程と教材の現場での使用を通じて得られた体験的な学習を、「松江地域の特色ある多文化共生社会の構築」への道のひとつの試みのモデルと見なした際の評価について論じる。

Ⅱ. 『まつえりあ』開発に至る背景

松江市がHP上で公表している最新の統計によると、松江市には、平成20年3月現在で約1,200人の外国籍の方々が住んでいる。これら在住外国人の中には、日本語能力の不足を原因とする様々な困難を感じている人々もいる。そこで、日本語学習を希望する人々を対象とした、ボランティアによる日本語教室が複数開設されている。

こうした日本語教育支援のボランティア活動が、松江市で積極的に始まったのは、平成6年に(財)島根国際交流センター(現(財)しまね国際センター)主催の「しまね日本語ボランティア養成講座」が開講されたことがきっかけであった。この講座の修了者を中心にして「日本語ボランティアグループ“だんだん”」が設立された。その後、ボランティアグループの数は増え、本稿執筆時点(平成20年12月現在)で、松江市内において、「島根県日本語ボランティアグループネットワーク会議」に参加している団体は、“だんだん”を含めて4団体ある。その他、任意のグループの活動も積極的に行われている。

一方、島根大学に目を転じると、本学の留学生数は正に松江市の地域日本語支援活動が求められた時期に急増したことに改めて気付かされる¹⁾。すなわち、本学の留学生数は、平成元年度には27名であったが、平成7年度には約5倍の128名へと6年間で急増している。留学生を含む外国人の急増が、地域における日本語ボランティアによる日本語支援活動への期待を高め、結果的に日本語教育支援ボランティア活動が開始されたのが、平成6年前後の時期であったことになる。松江市地域の在住外国人の特性として、日本語学習を希望し日本語ボランティア教室に来室する外国人のうち留学生の占める割合が多いことが挙げられる²⁾。この状況は現在も同じで、松江市が島根大学を有する学園都市であることを顕著に示している。表1は、本学が平成20年5月現在受け入れている留学生の身分内訳を表している。

表1. 島根大学留学生の身分別人数(平成20年5月現在)

キャンパス	松江	出雲 (医学部)	島根大学 全体
学部学生	35	0	35
大学院学生	78	27	105
研究生等	33	0	33
総計	146	27	173

注：松江キャンパスの大学院学生数は、
鳥取大学大学院連合農学研究科所属の学生を含む

留学生総数は173名で、そのうち松江キャンパスで学んでいる留学生は146名である。松江キャンパス留学生の内訳は学部学生35名、大学院学生78名、研究生等33名となっている³⁾。留学生全体の8割近くを占める大学院学生・研究生等の資格で在籍している留学生の中には、研究活動を英語で行うことを前提にしているために、日本語能力の充分でない学生が多い。更に、家族同伴で来日している場合もある。留学生本人やその家族が、日常生活に必要な基礎的な日本語を学ぶ必要を感じて、学外の日本語ボランティア教室に通う例が多く見られた。このため、

松江地域の日本語ボランティア教室に参加する外国人学習者の総数に対する島根大学関係者が占める割合は極めて大きい。平成13年度の調査では、7割超が島根大学の留学生とその家族であった²⁾。その後の調査では、結婚等による定住者の割合の増加が見られたが、島根大学関係者による受講の割合は大きく、現在でも全体の5割を占めている⁴⁾。

本学の出雲キャンパスの位置する出雲市地域に目を転じると、状況は全く異なっている。ここには、日系ブラジル人の集住地域があるために、地域の日本語ボランティア教室に来る外国人の多くが、これら日系ブラジル人であるという特徴がある。このため、地域の日本語ボランティア教室に来る外国人総数に対する出雲キャンパスの留学生の割合は松江ほど多くはない。このように、地域の特殊事情によって日本語教室の現場の状況は多様である。

筆者らは、留学生教育や日本語ボランティアの研修に携わる傍ら、平成12年以降は、本学の位置する松江地域の事情について、本学留学生の日本語学習に係る状況を中心として、地域事情の調査を行ってきた。その過程で、多数の島根大学留学生が学習している松江地域の日本語教室の現状を分析した。その結果、日本語ボランティアのニーズの中に、本学のハードとソフトの両面のリソースを必要とするものが多数あることが判明した。例えば、公開講座の実施、学内での日本語教室の実施、図書館などの施設の開放などであり²⁾、我々は本学と地域の連携の必要性を強く感じてきた。これらについて、本学公開講座、学術雑誌、研究会などを通じて提言を行ってきた²⁾⁴⁾⁵⁾⁶⁾。表2に、筆者らが本学内で実施した活動の例を挙げた。

表2. 地域文化事情読み物『まつえりあ』に関して島根大学で行なった活動

活動時期	活動内容
平成16年	公開講演会（講師：松田みゆき） 「留学生特別コースの留学生への地域の日本語教育支援 — 松江市における実例 —」
平成17年	公開講座（講師：山本達之、松田みゆき他5名） 「松江地域における国際交流の現状と未来」
平成19年	公開講座（講師：山本達之） 「松江地域文化を語る — 松江地域事情日本語教材の開発 —」 1
平成20年	公開講座（講師：山本達之） 「松江地域文化を語る — 松江地域事情日本語教材の開発 —」 2

注：公開講演会は、島根大学生物資源科学部の主催で、公開講座は、いずれも島根大学生涯学習教育研究センター主催、(財)松江市国際交流協会共催により行なった。

講演会は、前述の大学院学生・研究生等が主に理系に多いことに着目して彼らの現状について情報共有するため実施した。島根大学公開講座では、日本語ボランティアの方々に学習の機会を提供することが、地域の大学である島根大学の知的リソースとしての役割であろうとの考えから開講した。この公開講座によって、日本語ボランティアの方々に留まらず、広く国際交流、在住外国人問題などに関心のある松江市民の方々やグループとの意見交流をすることができ、連携の必要性が確認できた。表2に示した以外にも、(財)松江市国際交流協会などの協力により、複数回の講演会や勉強会を、松田が実施した。

これら講演会や公開講座の活動を通じて、日本語ボランティアは、留学生などの在住外国人にとって大変心強いサポーターであると自らも学び続ける生涯学習者であることやボランティア活動に互恵性を感じていることも明らかになった。講演会や公開講座の後に実施したアンケートの中には、特に「自分たちの手で自分たちの地域の文化を紹介してみたい」という強い要望が記されていることも多かった。そこで、日本語ボランティアや公開講座受講者の方々との議論を通じて、筆者らは、松江地域の文化事情に密着した日本語読み教材を開発してはどうかという構想に至った⁴⁾。これが、本稿で扱っている『まつえりあ』の原点である。以下に概略を紹介する。

Ⅲ. 『まつえりあ』開発の実際

1. 編集委員会の立ち上げ

松田が担当した日本語ボランティアの研修会（平成12年より毎年）などで、松江地域の文化事情に密着した日本語読み教材の作成がワークショップの形で行われていた。その後、現在の形の冊子『まつえりあ』を開発するための『「松江地域事情小冊子（仮題）」企画編集委員会』を松田が中心となって平成18年12月に組織した。この編集委員会は、筆者の他は、(財)松江市国際交流協会が主催する「外国人のための松江日本語講座」で「日本語指導ボランティア」として活動中の有志9名が構成員である。この編集委員のうち7名が、松田が講師を担当した「(財)松江市国際交流協会主催『2006年度日本語指導ボランティア養成講座』」の受講者である。これらの方々は、日本語ボランティアとしては、比較的経験の少ないメンバーと言える。

筆者らは、執筆する対象と、読者に関してより深く知る必要性を感じて、企画編集委員の勉強会や自主的な学習の機会を設けるよう配慮して活動を行ない、本学公開講座なども積極的に活用した。一連の活動は、(財)松江市国際交流協会の協力を得ながら、その全てを無償ボランティアとして行った。また、本冊子への広報と親しみを深める目的で、冊子名を公募によって決めることとした。編集委員会活動を通じて冊子名の公募を行なって、平成19年6月には、その名称を決定した。名称の公募には、39件の案が寄せられたが、最終的に、「松江地域」を意味する「まつえ」と「エリア」を掛けて創った『まつえりあ』が選ばれた。それに伴い企画編集委員会の名称も『「まつえりあ」企画編集委員会』に変更された。本稿では、略して編集委員会と呼ぶ。

2. 教材開発に先立つ調査とその結果

『まつえりあ』開発に先立って、松田は以下の3種類の聞き取り調査を行ない、その結果を本教材開発活動に反映した。

【調査1】平成13, 18, 19年（対象：日本語ボランティアと外国人日本語学習者）

「松江における文化交流の現状と、松江地域の文化事情に関する認識の聞き取り調査」

【調査2】平成13, 14年（対象：日本語教室に来室している外国人学習者と島根大学留学生）

「地域語（出雲弁）使用実態・意識調査」

【調査3】平成18年（対象：企画編集委員）

「松江地域事情として語りたい項目調査」

これらの調査の結果、以下の点が明らかになった。

【調査1】の結果：

- 1) 地域におけるボランティアによる日本語教室は、多様な文化の接触の場であり、国籍等の背景に関係なく、参加する各人が主に日本語を使用して自文化を語る絶好の機会であること。
- 2) 文化に対する見識の相違や、伝えるべき自文化の情報選択の迷いや知識不足に気付いたためにコミュニケーション上の心理的障壁が生じ、積極的な会話に躊躇してしまうこと。
- 3) 日本語学習者である外国人に対して平易な日本語を使用したいと考えるが、日本語文型や語彙のコントロールに困難を感じ、発話に対して自信の持てない日本人がいること。また、逆に日本語能力に自信がないため話したい気持ちが十分に表現できない外国人がいる。これが、日本語ボランティアと外国人の相互交流の妨げになっていること。
- 4) 日本語教室等の支援活動の場は、日本語ボランティアが、自分自身の持つコミュニケーション能力や自らの文化などについて改めて内省する機会を提供しており、それが生涯学習への動機となっていること。

上記、1)の状況では、異なる互いの文化を知りあい、認め合って対等な友好関係を築こうという意思が読み取れる。日本人からは紹介したいと考える松江の事物についての項目を多数挙げてもらった。しかし、2)の状況では、受け入れがたい異質性や、それが近隣に存在することがもたらす変化への拒否感情なども生じ始める。それでも善意のボランティアは、3)の状況を解決するために日本語教育の技術的な問題を克服しようと努力したり、自らの日本語への見識や地域文化への勉強不足を感じ、自己研鑽へとエネルギーを傾ける方も多い。

【調査2】の結果：

『まつえりあ』の出雲弁コーナーで取り上げる出雲弁の選択と場面設定の参考にした。

更に、外国人の日本語学習者が感じている以下のことが明らかになった。

- 1) 地域語（出雲弁）と教科書で学ぶ日本語との乖離が、日本語学習の困難点の一つであると感じていること。
- 2) 日本語学習者は、地域語（出雲弁）を自ら使用することが、松江地域の人々との親しみを増す効果があると体験により感じていること。
- 3) 上記の1)と2)の理由により、日本語学習者は頻出する地域語に対する強い学習要求があること。

【調査3】の結果：

松江地域事情として語りたいと思う項目が多数挙がった。

調査1の結果も踏まえて、『まつえりあ』の章立ての根拠とした。

3. 編集委員会の活動

編集委員会は、以下のような活動を行った。

平成18年

12月：『『松江地域事情小冊子（仮題）』企画編集委員会』発足

平成19年

5月：試用版発行

(財)松江市国際交流協会主催「外国人のための松江日本語講座」で試用
『松江地域事情小冊子（仮題）』名称募集

6月：『まつえりあ』に決定…これにともない編集委員会の名称変更

7月：『まつえりあ』第1版発刊，キャラクター募集

『まつえりあ — 松江日本文化講座特別号 —』発行

(財)松江市国際交流協会主催「韓国青年松江日本文化講座」で教材使用
ホストファミリーにも配布

8月：(財)松江市国際交流協会主催「外国人のための松江日本語講座」で正式使用開始
(現在に至る)

9月：島根大学公開講座「松江地域文化を語る」のワークショップで『まつえりあ』を教材として使用（平成20年も同様）

平成21年3月：改訂版発刊（予定）

また、平成18年度以降、以下のように編集会議と勉強会を実施した。

平成18年度 編集会議4回，勉強会1回

平成19年度 編集会議10回，勉強会6回

平成20年度 編集会議1回，勉強会13回

IV. 『まつえりあ』の紹介

筆者らは、『まつえりあ』が、松江での生活について地域の方々と語り合うための交流の道具となるように心がけて企画編集を行なった。

以下、「体裁」「内容項目」「日本語レベル」「図版」「表記」「認知度レベル」「活用されている現場」について概要を述べ、日本語学習者側（F）、日本語ボランティア・編集委員側（E）のそれぞれの視点から『まつえりあ』の特徴を紹介する。

<体裁>

A4版，全48ページ，オールカラー

A3サイズの付録「松江すごろく」付

<内容項目>

以下のような内容を項目ごとに扱った。目次に記載したタイトルを列挙する。

松江市—あなたの家はどこですか？／松江と外国人／松江で日本語を学ぼう／花—桜 牡丹
椿／島根県知事、松江市長／宍道湖／宍道湖の夕日／嫁ヶ島／嫁ヶ島の伝説／宍道湖七珍／宍
道湖七珍料理／松江城／このしろ—松江城の伝説／小泉八雲／雪女／松江の観光／松江水郷祭
／松江祭鬃行列／松江の海／加賀の潜戸で／日本の温泉／松江の温泉／日本のお茶／松江のお
茶文化／出雲弁コーナー①～⑥／[付録]松江すごろく

「松江すごろく」は、松江地域の地図を模したすごろくである。

「出雲弁コーナー」では、地域語を1コマのイラストで紹介している。前述の「地域語（出
雲弁）使用実態・意識調査」の結果から、以下の2種類の地域語が必要とされていることが分
かったので、それぞれから計6例を扱った。

地域語1：日常の会話の中に頻出し、耳にすることが多い。共通語との置き換えを学べば、
比較的容易に学習できるもの。

①しちょう＝している ②けん＝から ③こげ／そげ／あげ／どげ＝こんな／そ
んな／あんな／どんな ④～だがあ＝～だよ

地域語2：代表的な出雲弁で、多くの人が知っている。しかし、実際に若い世代の人は使用
していない例が多いもの。

⑤だんだん＝ありがとう ⑥ばんじまして＝（黄昏時の挨拶）

E：自分たちの住む地域を生活者の視点で紹介しようと心掛けた。「国際文化観光都市松江」
の「観光」の面のみをクローズアップしてしまうと単なる観光ガイドブックになってしまうの
で、住民の視点で項目を挙げ、執筆した。小泉八雲の作品をリライトする際、英語原文に当た
たり、作品についての理解を深めるために参考資料を読んだ。その他、歴史、地理、伝統文化
など執筆に必要な関連事項の知識を得るなど勉強を楽しみながら執筆した。

<日本語レベル>

『まつえりあ』は、「読み教材」ではあるが、内容確認のための質問、単語や漢字、文法事
項の説明、練習問題などは付けていない。この点は、精読用の読み教材とは全く異なっている。
このため、読み物としてそのまま純粋に楽しむことができる。日本語学習者の日本語能力の段
階に配慮した日本語によって書かれた読み物であるところが特徴である。目次と各項目最初の
頁には、3段階に区分した日本語レベルを表示した。この日本語レベルは、NPO法人日本語
多読研究会のシリーズ⁷⁾に準拠して設定した。『まつえりあ』執筆者の勉強会の際には、NPO
法人多読研究会に御協力頂き、同研究会が執筆の際に使用している「文型・語彙リスト」を参
考にさせていただいた。

F：自分に合った日本語レベルから読み物を選んで読むことができる。また、自分の日本語
レベルを知ることができる。

E：レベル別にコントロールされた日本語を書くことが、学習者にとって平易な日本語を話
すための訓練としてとても役に立った。実際に執筆することによって、日本語の文型や文法・
語彙についての理解が深まった。

<図版>

図版を多用した。写真は編集委員が撮影したものの他、フリーでダウンロードできる「松江百景」のHPや松江市役所観光振興部から提供いただいた。イラストは、編集委員の他、日本語ボランティアの有志が描いた。

F：文字を読まなくても、ページ毎に自分の興味の有無の見当が付くため、読みたい項目のページを選びやすい。また、本文を読むには日本語能力が十分でない学習者であっても、写真やイラストを見て、「知っています／行きました／好きです／食べました／どこですか」などの発話をして楽しむことができる。内容に興味がある時は、新しい日本語表現を学習する機会となる。時には、日本語以外の言語で会話が弾むこともあり、情報収集が促される。親しい編集委員や日本語ボランティアの描いたイラストのあるページは、特に興味を持って読むことができる。

E：編集委員や日本語ボランティアの中で、絵の上手な方の才能発揮の場となった。写真提供協力のお願いに松江市観光振興課などに出向いた際には、『まつえりあ』の企画意図を話す機会となり、広報ができた。

<表記>

常用漢字を使用して、総ルビにした。漢字を読まずに主にルビ部分を読む学習者のことを考えて、ルビのフォントを大きめにした。付録のすぐろくには、ルビをつけなかった。

F：漢字圏の学習者にとっては漢字が意味を知る上での手助けになるため常用漢字使用は助かる。一方、非漢字圏の学習者は、ルビ部分を読みながらも、目の端に漢字を入れ続けることによって、漢字に親しむことができる。

E：読み

すぐろくに取えてルビを付けなかったのは、日本人と一緒に遊ぶことを想定して、日本人の音声で自然に地名の読みを覚えてもらおうと考えたからである。現実の生活において、一畑電鉄の駅名には、ひらがな表記が見られるが、松江市内の道路標識などの地名表記は、漢字とローマ字表記である。実際にすぐろく遊びをした際、ゲームをする上ではほとんど問題なく、むしろ見たことはあるが読み方の分らなかった地名の読み方を紹介する機会ができた。

<認知度レベル>

『まつえりあ』では、「多くの人が知っていること」という説明文とともに、認知度を人の顔の数でレベル表示した。人の顔の数は1つから5つまであって、顔の数が多いほど認知度の高い情報であることを示している。

本教材では、松江地域に古くから居住する住民の認知度が高い話題を中心に取上げた。例えば、「宍道湖がある」ということは、認知度の高い情報であり、その宍道湖に浮かぶ大変特徴的な島「嫁ヶ島」やその伝説については、松江に住んでいるなら知っているほうが良い情報と考えられる。宍道湖畔を通りかかる時に、ふとその伝説に思いを馳せつつ嫁ヶ島を見たり、隣人との話題にして時間を共有する…というような体験の積み重ねが、自らの住むこの地に愛着を感じ生活を楽しむことへと繋がると考えられる。従って、これらの情報を取り上げること

は有意義であるということになる。

その一方で、大多数の人が知らないような、いわゆる「知る人ぞ知る」地域情報や民話も多い。『まつえりあ』に載せる情報があまりに詳細に渡ることになると、一部の郷土研究家にしか通じないような情報も同じ『まつえりあ』の中で取り上げてしまう可能性がある。そして問題なのは、これらを一旦『まつえりあ』に載せてしまうと読み手にとっては、全く同等の情報として扱われてしまうことである。そこで、認知度についての情報を加えて提供することによって、実際のコミュニケーション上の問題を解決できると考えた。もちろん、民話や文化情報に優劣があるわけでは無く、このレベルは、あくまでも認知度を示している。これらの認知度レベルについては、前述の調査結果を元に編集委員の話し合いで決定した。

<活用されている現場>

平成18年5月に、(財)松江市国際交流協会の「外国人による松江日本語講座」で試用版を初めて使用した。その後、平成18年8月には (財)松江市国際交流協会の国際交流プログラムで、来松した韓国の大学生とそのホストファミリーが特別版を使用した。現在は、(財)松江市国際交流協会の「外国人による松江日本語講座」で、第1版を副教材として使用している。その他、松江市内日本語ボランティアグループ（日本語ボランティアグループ“だんだん”，松江日本語指導ボランティアかけはし，日本語ボランティアいろはの会，多文化共生ネットワーク），しまね子ども日本語教育協会「しまねっこ」，出雲市内の日本語ボランティアなどに配布した。

V. 『まつえりあ』の評価と今後の展開

平成19年度文化庁日本語教育研究委嘱の報告書の中では、地域の日本語教室に期待される機能が、以下の5項目にまとめられている⁸⁾。これらの項目は、外国人だけでなく、生活者としての日本人に対しても同様のことが当てはまるとされている。

- 1) 自分が自分として認められる場 — 居場所
- 2) よりよい生活を確保するために必要な情報が入手できる場
- 3) 異文化理解の場
- 4) 問題解決の場
- 5) 社会参加を実現していく場

『まつえりあ』開発に際して、これらの5項目を満たした活動が、編集委員会、勉強会、日本語教室などにおいて、企画編集委員同士の交流によって実践され、結果的に理解と親睦につながった。文化を個人レベルで捉えようと、常に人間は社会の中で、多文化に触れていると言えよう。そう考えると、多文化共生という用語は、必ずしも外国籍の隣人の文化との共生に限ったことではなく、『まつえりあ』開発の場そのものが多文化の擦り合わせの場であり、共生の知恵によって初めて『まつえりあ』は生まれたのである。

日本語ボランティアにとって日本語教室は、新たな文化との接触の場であり、自身の持つコミュニケーション能力や自文化について改めて内省する場となっている。このため、それが日本語ボランティアのボランティア活動継続の原動力とも、生涯学習への動機ともなっている。『まつえりあ』は、日本語教室のような多様な背景を持った参加者が自文化を語る絶好の機会において、語りたいと感じている自らの地域の文化を語るきっかけをつくる道具として好適である。そうした一連の流れを視覚的に図1にまとめた。日本語ボランティア（図1左側の人物）は自文化を持って存在している。その文化背景を持ちつつ、日本語学習の現場で計画を伴った実践と、そのフィードバック・内省を重ねながら、活動を継続し、異文化交流・理解を深めて行く。この過程の繰り返しによる個人の変化が自他の文化への理解を深め、日本語指導や交流を円滑化することとなる。

一方、日本語教室に通ってくる外国人（図1右側の人物）にとっても、日本語教室は、自文化を語り内省を重ねながら、多文化交流を深めてゆく場である点では共通している。『まつえりあ』を仲立ちとして、自分の文化を語って自尊感情を実現する場（上記項目1）を得たり、松江地域の情報を入手し（上記項目2）、日本語教室の参加者との交流を通して多文化理解が促進される（上記項目3）。更に、日本語教室での日本語学習や多文化接触の経験を生かして、生活上の問題解決（上記項目4）を行ったり、松江地域の住人として社会参加して行く（上記項目5）原動力としている。

日本語教室の全ての参加者相互が、自文化の発信と内省の過程を繰り返し、自らを高め（生涯学習）、変化し続けることによって新しい松江地域の文化を形成し、多文化共生社会の構築が少しずつ実現されて行くことが期待される。日本語ボランティア側の発信情報を載せた『まつえりあ』は、日本語教室におけるその道具のひとつと成り得るだろう。

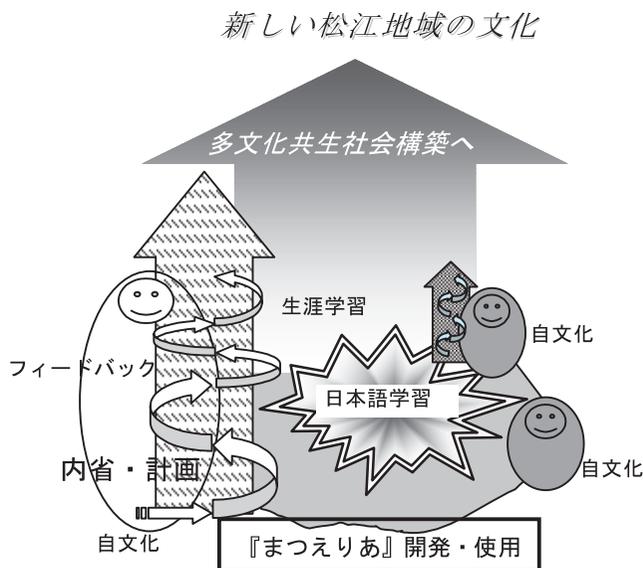


図1. 『まつえりあ』の開発・使用と参加者の内省と実践の継続による多文化共生社会構築への道

日本語教育では、学習者中心の教室運営を考えることが一般的とされている。この考えでは、学習者の自己表現活動を促すことが多い。一方『まつえりあ』は、日本語ボランティアのアウトプットの要求から生まれた読み物である。しかし、日本語ボランティアが自らを語ることによって、学習者側からの自己開示も大いに促進すると期待される。繰り返しになるが、相互に自文化を語ってコミュニケーションをとり、フィードバックの中から生じる変化の積み重ねから、新たな松江地域文化の創出が望めるのではないだろうか。

『まつえりあ』の開発は、松江地域の特色ある多文化共生社会の構築を目指した試みの一つと言えよう。

<ホームページ作成>

前章で述べたように、『まつえりあ』は交流の道具として開発された読み教材である。その開発に際しては、日本語ボランティアをしている松江市民側からの発信であることを意図した。すなわち、本教材開発を契機にコミュニケーションが始まることを望んで創られたのであり、その過程こそが多文化の出会いの場を創ることになる。今後は、その文化接触の場の記録や成果を含めた読み物をなるべく速やかに読み手に届けたいと考えている。そのために、平成20年12月にホームページ (<http://www8.ocn.ne.jp/~m-area/>) を開設した。現在充実を図っているところである。

<執筆者の拡大>

『まつえりあ』の記事に触発されて自国のことを教室で語り始める学習者は非常に多い。今後は、彼らの手による文化事情の記事や『まつえりあ』を読んだ感想を掲載予定である。学習者側からの発信として以下の方々の記事を予定している。

韓国から松江に來訪する大学生の手による Show & Tell 原稿。

(財)松江市国際交流協会では、国際交流事業として、毎年夏、韓国からの大学生を受け入れている。その際日本や松江の文化について学ぶ「松江日本文化講座」を実施しており、松田は平成14年より日本語講座の講師を務めている。平成16, 17, 19年には、ホームステイ先での自文化紹介のための Show & Tell 原稿作成した⁹⁾。韓国から持参したお土産の紹介文や、韓国の伝統文化紹介の他、自分の趣味や好きな日本文化などの内容もある。

島根大学を卒業し現在日本企業で働いている元留学生

『まつえりあ』の発刊のニュースを聞き、松江地域の日本語ボランティアの方々との交流の思い出などを綴ったエッセイ「松江ノススメ」を寄稿してくれた。このエッセイは、主に現在松江に住んでいる外国人に対して「松江での生活をしよう」というメッセージが込められている。

2007年に隠岐郡海士町で開催された「島根県在住外国人日本語スピーチコンテスト」参加者結婚のため来日した際の経験を語ったスピーチ原稿¹⁰⁾を一部改変して掲載予定である。

<利用者の拡大>

地域の日本語教室では、参加者が互いに語り合う場が確保されているのであるから、日本語

学習者には、このような生のコミュニケーションの場に身をおいて是非大いに語り合ってもらいたいと感じる。しかし、地域の日本語教室は、ある程度日本語が出来るようになると生活者である日本語学習者にとっての重要度は低下し、教室に来る必然性も失われて行き、次第に足が遠のくようである。これは、仕事場などの現実の社会環境で日本語を使用する段階への移行の表れであり、歓迎すべきことであると認識してはいるが、社会生活を送る中でこそ様々な文化的な問題に遭遇するのではないかと想像している。これらの問題解消のヒントを得るための読み物、あるいは発信の場として『まつえりあ』が活用されることを期待している。ホームページからのアクセスが可能になると、日本語教室に来ていない利用者の拡大に繋がると考えられる。

広報の場を日本語教室に限らず、国別出身者が任意で作っている団体などに拡げることも考えたい。例えば、日本人配偶者のフィリピン人による組織「松江ピノイカピットビシィング」などとの連携が挙げられる。これ以外にも、本稿の第IV章で述べたように、国際交流プログラムに協力するホストファミリーの方々による利用も継続して拡充したい。例えば、松江市八雲村で定期的に開催されている八雲国際演劇祭においての利用を、現在計画中である。

<島根大学との連携の強化>

本学主催の公開講座は、これまでに述べてきたように、地域に密着した日本語ボランティア活動の支援に極めて重要である。本学主催の公開講座を受講した結果、自文化の発信することによって得られるいわゆる「お国自慢」ができたことへの満足を挙げた方が多かった。この自尊心を満たしつつ、他の多くの未知の文化への興味と理解が促進されたという趣旨の感想が、公開講座に参加された日本語ボランティアのアンケートにあった。さらに、『まつえりあ』の執筆が日本語の語彙や文型のコントロールの練習になり、日本語指導をする際の技術が向上したと感じるボランティアも多かった。

公開講座を通じた地域との交流が、今後も継続することによって、更に地域の大学と地域社会との連携が進むことが期待される。

<参加型学習の教材としての活用>

多文化共生社会構築へ向けて、地域日本語教室における新たな日本語学習の形として参加型学習¹¹⁾が推奨されている。参加型学習では、豊かな人間関係を構築するために対等に自分を語ることが歓迎されている。『まつえりあ』を使用した日本語学習の形態は、このような自尊心を満たす参加型学習活動に繋がると考えられる。教材として更に活用していきたい。

<他地域への発信>

他地域で日本語ボランティアをしている方々や日本語ボランティアの養成に携わっている担当者が、『まつえりあ』に関心を持ってくださることも少なくない。これからは、是非『まつえりあ』の開発を通じて得た楽しさと意義を伝えるために、「自文化である地域文化を語るための指針」を発信したいと思っている。主な内容は、以下の4項目である。

- 1) 文化事情項目の分類と選定のプロセス
- 2) 地域語の選定と提示方法
- 3) リライトの手法
- 4) 著作権への配慮

VI. まとめ

日本の至るところで外国人の定住化が進み、各々の地域において、多文化共生社会構築の必要性は益々大きくなっている。「如何に多文化共生社会を実現していくのか」という課題を、今後避けて通ることはできない。

平成18年に、総務省から出された報告書¹²⁾において、多文化共生社会実現のための地域日本語教室における活動の重要性は再認識された。平成19年には、文化庁文化審議会国語文化会に日本語教育小委員会が設置された。

地域の日本語教室で現実に文化接触場面に身を置いている方々の活動は、正に多文化共生社会への取り組みの縮図である。そして、そこから生まれた「地域文化事情読み教材『まつえりあ』」は、この松江で、地域の大学との連携で作成した一つのモデルである。また、この活動が、ボランティアと外国人が各々内省と計画・実行を繰り返して行く過程で気づき学びあい、双方の変容によって理解が促進されてゆく様子を見ることが出来た。この取り組みを広くケーススタディとして他地域に発信するとともに、多文化共生社会構築の試みの一つとして今後も取り組んで行きたい。

謝辞

本稿を執筆するに当り多くの方のお世話になりました。一緒に『まつえりあ』を作成した編集委員会の皆様には、心より感謝申し上げます。『まつえりあ』原稿執筆に際して、NPO法人「日本語多読研究会」の資料を使用させていただきました。ここに深く感謝申し上げます。公開講座を主催していただいた、鳥根大学生涯学習教育研究センター、勉強会実施などの便宜を図っていただいた松江市国際交流協会には、深く感謝申し上げます。

<参考文献>

- 1) 鳥根県留学生等交流推進協議会『国際交流しまね』1991～2008年
- 2) 松田みゆき「鳥根大学留学生の日本語教育の現状と課題 — 日本語ボランティアグループと鳥根大学の連携の必要性について — 」『鳥根大学生涯学習教育センター研究紀要』第1号, 2002年, pp.15-33.
- 3) 鳥根大学広報・公聴委員会『国立大学法人鳥根大学大学概要2008-2009』2008年
- 4) 山本達之・松田みゆき「生涯学習者としての日本語ボランティアが地域の大学に期待するもの — 松江地域事情に密着した日本語地域教材冊子の開発 — 」『鳥根大学生涯学習教育センター研究紀要』第5号, 2007年, pp.1-14.
- 5) 山本達之・松田みゆき「公開講座を通して考える『松江地域における国際交流の現状と未来』」『鳥根大学生涯学習教育センター研究紀要』第4号, 2006年, pp.11-21.

- 6) 松田みゆき・山本達之「地域文化事情読み教材『まつえりあ』の開発」『日本語教育学会2008年度春季大会研究発表予稿集』2008年, pp.204-205.
- 7) NPO法人日本語多読研究会『レベル別日本語多読ライブラリー にほんごよむよむ文庫』アスク出版, 2006年
- 8) 日本語教育学会『外国人に対する実践的な日本語教育の研究開発（「生活者としての外国人」に対する日本語教育事業）- 報告書 -』第1章-第3節 地域日本語教育システム構築に向けて, 2008年, pp.24-39.
- 9) (財)国際交流協会『2004年度松江・日本文化講座報告書』2004年
- 10) 隠岐郡海士町スピーチコンテスト実行委員会編, 『2007年島根県在住外国人による日本語スピーチコンテスト報告書』2007年
- 11) むさしの参加型学習実践研究会『やってみよう「参加型学習」! 日本語教室のための4つの実践 ～ 理念と実践 ～』スリーエーネットワーク, 2005年
- 12) 総務省『多文化共生の推進に関する研究会報告書 ～ 地域における多文化共生の推進に向けて ～』2006年